

外の目から見た 在京飯田高校同窓会機関誌 『稲穂』

法政大学国際文化学部教授 高柳俊男

●たかやなぎ・としお
1956年生まれ。栃木県出身。専門は朝鮮近現代史、とくに日本に暮らす人々の歴史・文化や、日本と朝鮮半島間の交流・相互認識など。自分で育てた珍しい野菜を自分で調理して食べるのが一番の趣味で、今年は源助かぶ菜の種も蒔く予定。



「飯田・下伊那文庫」の前で

学部として飯田で留学生主対象の国内研修を行うと決り、第1回のプレ研修を実施した10年前、担当者に任じられた私が飯田について知るところはごく僅かだった。その後、関連書を読んだり、現地に足を運んだりする中で、飯田・下伊那、さらには三遠南信全般についての知

だらう。関係者だけの内輪話ではなく、一定の普遍性や学術性も担保して後世に耐える雑誌づくりをしようとする、その苦心は倍加する。誌面をたどると、歴代の編集委員諸氏の創意工夫や奮闘の跡が偲ばれる。

とはいえ、より多くの同窓会員に本誌を身近に感じてもらうためには、まだ冒険してみてもよい試みがあるようにも思われる。本誌を読んでいつも感心するのは、飯田高校が多方面にわたって優れた人材を輩出してきた事実である。そのこと自体は素晴らしいの一語に尽きるが、それが立志伝、すなわち功成り名を遂げた人々の成功談に傾くとしたら、それは同窓会誌としては必ずしも望ましいことではないだろう。その点、フレッシュな卒業生の登場が近年目立つのは良い傾向だと思う。各界の最前線で活躍してきた著名人だけでなく、ごく普通の人生をつつましやかに送る市井の庶民の中にも、共有すべき体験や主張、そして母校や郷里への秘めた想いがきつとあるに違いないからである。そうしたものを引き出すために、たとえば「飯田高校時代のいちばんの思い出」や「伊那谷出身者でよかったと感じる瞬間」などのアンケートを、字数を決めた上で広く募る企ても面白いのではないか？ それが新たな書き手の発掘につながることもありえよう。

識や人間関係を徐々に深めていった。その過程で、多くの現地関係者にお世話になったが、東京では何と云っても在京飯田高校同窓会の皆さまのご厚意を抜かすことができない。

同窓会総会へのご招待や「飯田ゆかりの地を歩こう会」への参加から始まって、近年では同学年である高27回生の暑気払いなど、よりプライベートな場に誘っていたことも多い。そして今回、機関誌『稲穂』への執筆依頼が舞い込んだ。聞くと、本誌に会員以外の人が書くのは初めてだという。そこに、今後「関係人口」との連携を図っていききたいという、佐々木康夫前会長をはじめとする役員各位の積極的な意図を感じた。畏れ多く思うと同時に、この機会に本誌について若干の感想や意見を述べることで、これまでのお力添えに応えることとしたい。

充実した毎号の会誌内容

現在までに刊行された『稲穂』全16冊を見て感じるのは、一定の分量と充実した内容をもつ会誌を16年間、きちんと出し続けてきた継続性である。同窓会誌の使命は、何と云っても同じ学び舎を出た同窓同士の親睦だが、同学年だけではなく、半世紀以上にも及ぶ上下の学年を広くつなぐ媒体だと考えると、そこには多くの苦労が伴う

こんな企画があったなら？

毎号、何らかの特集を設けるのも、一案かもしれない。実は筆者は、飯田で発刊されている『南信州新聞』本年元旦号に、浜松で出ていた雑誌『遠州のしなの』について紹介文を書いた。静岡県西部に暮らす信州出身者の同郷会雑誌だが、各号において特集やテーマを定めていたのが特徴的だった。本誌でも特集を設け、そのテーマをめぐる座談会などを開いてみるのはいかがだろうか？

個人的にこんなコーナーがあったらと望むのは、伊那谷関連書の書評や紹介である。いま首都圏で暮らす皆さんは、どんな本を通じて故郷への認識や愛着を育んできたのであろうか。伊那谷を知らない知人に、「ぜひこの本を」と勧めるとしたら何になるのか。「伊那谷のこの1冊」とでも題して、自分にとってかけがえのない本を教えていただけると、学部に「飯田・下伊那文庫」を設け、研修用書籍を徐々に増やしている立場からもうれしい。

以上、言わずもがなの事柄かもしれないが、深いお付き合いをありがとうと思う「関係人口」の一人として、提言も含めて感想を述べさせていただいた。各世代の様々な声が盛り込まれた会誌次号を拝見させていただくのを、また楽しみにしている。